

# UNITE

ユニテ

## 16

特集・宮本正清 追悼号 1988・11



財団法人 ロマン・ロラン研究所

自筆の日記（1952・2・19）から。



宮本 正清

1898・8・16－1982・11・16

〔略年譜〕

- 一八九八年 八月十六日、高知県長岡郡上倉村奈路に生まれる。  
一九〇一年 奈良尋常小学校卒業。白木谷高等小学校を一年で退学。一九一四年、台湾総督府勤務の叔父長曾我部重親と叔母慶喜に伴われ台北に行く。中学一、二年の学科を独学し、一九一五年、台北中学に入學。同地で島村抱月の講演を聴いて、早稲田進學を決心する。叔母夫妻の事情で神戸に移る。  
一九一六年 関西学院中学部へ編入。  
一九一九年 早稲田大学高等予科入學。  
一九二一年 早稲田大学文学部仏文科入學。  
一九二四年 ロマン・ロランを、わが国ではじめて卒業論文とする。論文名は「ロマン・ロランの人間信仰と人間愛」。さらに大学院で一九二六年まで、近代フランス文学を吉江喬松教授の下で研究。  
一九二五年 「ジャン・クリストフ」(文教書院)  
一九二六年 日仏文化協会と関西日仏学館設立に参画。  
一九二七年 日仏文化協会と関西日仏学館の設立とともに、書記長(後の主事)兼教授に就任。  
一九三〇年 仏国勲章 *Officier de l'Instruction Publique* を受ける。  
一九三六年 日仏文化協会評議員。  
一九三七年 立命館大学予科講師。  
一九三八年 仏国勲章 *Officier de l'Ordre national du Dragon d'Annam* を受ける。  
一九三九年 立命館大学予科教授。  
一九四〇年 ロラン「敗れし人々」(弘文堂)  
一九四〇―四二年 「魅せられたる魂」(岩波文庫)

- 一九四一年 バルザック「幻滅」(共訳)(河出書房)  
一九四二年 京都日仏文化協会理事。  
一九四二年 立命館大学教授。  
一九四二年 ロラン「聖雄ガンジー」(東和出版社)、タゴール「東洋と西洋」(一条書房)  
一九四三年 A・フランス「わが友の書」(東和出版社)  
一九四三年 六月十五日、京都府警中立売署へ強制連行され、敗戦後の八月十六日に釈放される。同年から一九四九年まで、同志社外事専門学校、関西大学、同志社大学文学部、同志社女子大学の講師を歴任。  
一九四六年 「ロマン・ロラン全集」(みすず書房) 第一次発刊開始。ロラン「エンベドクレースとスピノーザ」(岩波文庫)  
一九四七年 ロラン「コラ・ブルニョン」「トルストイの生涯」(みすず書房)  
一九四八年 ロラン「ピエールとリュース」(みすず書房)  
一九四九年 六月、日本ロマン・ロランの友の会設立 副委員長となる。ロラン「マハトマ・ガンジー」(みすず書房)、詩集「生命の歌」(みすず書房)、「現代外国文学の諸相(共著)」(有斐閣)  
一九四八年―五〇年 「魅せられたる魂一七」(みすず書房) ルネ・ゲルッセ「新ヒューマニズム」(弘文堂)、ロラン「戦いを超えて」「クレランボー」(上)(下)(みすず書房)  
一九五〇年 大阪市立大学教授(仏語・仏文学)。十一月、フランス政府の招聘で、戦後ではじめて大学教授として渡仏。一年滞在の間、主としてロマン・ロラン未発表文献を調査する。ロラン「ラーマクリシュナの生涯」(みすず書房)。米国経由で一九五二年二月帰国。ロラン「道づれたち」(みすず書房)

- 房)
- 一九五三年 「ロマン ロマン作品集(10巻)」(みすず書房)  
 ロラン「敗れし人々」(「」)
- 一九五四年 ロラン「民衆劇論」(みすず書房)
- 一九五五年 七月、仏国勲章 Legion d'Honneur (Chevalier) を受ける。
- 一九五六年 「魅せられたる魂」(新潮社)
- 一九五七年 大阪市立大学付属図書館長。
- 一九五八年 「ロマン・ロラン」思想と芸術」(みすず書房)、  
 ロラン「インド」(「」)、「ロマン・ロラン全集(全35巻)」  
 第二次発刊開始。
- 一九五九年 大阪市立大学文学部長。
- 一九五九年 ロラン「敗れし人々」「戦いを超えて」「七月十四日」(改訳全集)(みすず書房)
- 一九六〇年 一月、インド政府の招聘を受け、インドへ出張。  
 ロラン「回想記」「ロベスピエール」「民衆劇論」「道づれたち」(改訳全集)(みすず書房)
- 一九六一年 日本ロマン・ロランの友の会委員長。  
 ロラン「コラ・ブルニオン」「ピエールとリュース」(改訳全集)「クレランポー」(みすず書房)
- 一九六二年 三月、停年退職。
- ロラン「ラーマクリシュナの生涯」(改訳全集)(みすず書房)、  
 ロラン「ヴィヴエカーナングの生涯と普遍的福音」(新訳全集)(「」)、「魅せられたる魂一、二、三」(中央公論社)
- 一九六三年 「魅せられたる魂」(河出書房)
- 一九六七年 日ソ友好親善使節団でソ連を訪問。ロラン「魅せられたる魂」(講談社)
- 一九六九年 京都精華短期大学教授。

- 一九七〇年 ロラン「マハトマ・ガンジー」(みすず書房)
- 一九七一年 私財を投じて、財団法人ロマン・ロラン研究所を設立。理事長。
- 一九七二年 京都精華短期大学長に選任される。京都日仏文化協会名誉会長。
- 一九七四年 仏国勲章 Legion d'Honneur (Officier) を受ける。
- 一九七六年 ロラン「母への手紙」「」から見ても美しい顔」(みすず書房)
- 一九七七年 京都精華短期大学理事長に選任。一九八〇年退職。
- 「魅せられたる魂」(河出書房)
- 一九七九年 「ロマン・ロラン全集(全43巻)」第三次発刊開始。
- 一九七七年 十二月三十一日から発熱。
- 一九八〇年 勲四等旭日小綬章を受ける。
- 一九八一年 詩集「焼き殺されたいと子らへ」(みすず書房)
- 一九八二年 十一月十六日午後零時三十五分、京都市東山区の京都第一日赤病院で肺炎のため死去。享年八十四歳。



ご白慢のコーヒーミル

# 目次

ユニテ・一六号 宮本正清 追悼号

## 詩 二篇

焼き殺されたいとし子らへ

宮本 正清 2

わらい

宮本正清先生の思い出

宮崎 市定 27

情熱の人

山田 忍 29

心の人 宮本正清先生を偲んで

山口 善造 31

## (追悼文)

新しいヒューマニズムを

笠原 芳光 5

宮本先生と英語

新道 弘之 7

宮本正清先生の想出

谷口 知平 9

追想 — 宮本正清先生のこと

H・デュルト 11

慈父のような先生

直木孝次郎 14

大地に平伏して

中江 要介 15

宮本正清先生とロマン・ロラン

中川 久定 18

私の宮本先生

長谷川治清 20

宮本先生と私

長谷川正海 21

宮本先生の「若さ」

原田 武 23

宮本先生

松下 明治 25

お世話にばかりなった話

井土 真杉 33

宮本先生と津高ロマン・ロラン女の会

小出 幸三 36

宮本先生の思い出

杉本千代子 38

思い出

永田 和子 39

心のアルバムから

成田 雅美 41

宮本正清先生の思い出

森口 康子 43

素顔の追想

宮本エイ子 45

財団法人ロマン・ロラン研究所だより

47

ロマン・ロラン セミナーだより

47

編集後記

大橋 哲夫 47

詩 二篇

宮本 正清

焼き殺されたいとし子らへ

六十一日の牢獄

飢餓の一線で支えられた六十一日

やせおとろえた肉体と

あちこちのねじがぬけおち、ゆるんだ精神

八月十六日

とつぜん青空のもとに

日の光のなかに投げりだされたわたしは

半生の肉体と精神に

ただ生きていたのだ

おそろしい自由を！

自由だ！ わたしの眸はさけぶ

道を、家を、緑を、空を、人を、埃りをみる

自由を！

自由だ！ わたしの喉はさけぶ

のみただけ水をのむ自由！

小便をしたときにする自由！

ああ、世界の最大の自由があるのだ

このおれには今！

八月の烈日にやけただれる道を

衰えきったわたしの肉体はたどりつつ

天地もつらぬくばかり

泣きさけび、どなり、おらび、わめき

よろこびたいこの自由だ！

だまって、ひよろひよろとあるきながら

妻とその老母にいたわられてかえる途に

おれは自由だ！

都大路をふきまぐる塵あくたの竜巻きに

ふきまぐられる自由だ

いつまでもこない電車を

いつまでも待っていられるおれは自由だ

じゃあじゃあ

水道を顔からあびながら

六十一日の油汗とともに万こくの涙を

ながしてもかまわない おれは自由だ

わらい

仕事につかれて

コラ ブルニオンを読み

ひとりで、窓で笑った

涙がでた

コラ ブルニオン親方は

笑って、あきらめて、しゃべったのだ

若気のいたりで、結婚できなかった

三十年昔の恋人と

わたしも三十年昔の

青春があったのだと思うと、

嬉しくて、たのしくて、

涙がわいたのだ

八月の明るい窓で

こんなに若い自分を……（一九四七・八）

『焼き殺されたいとし子らへ』から



愛用の辞書、万年筆、文鎮など

## 新しいヒューマニズムを

笠原 芳光

(京都精華大学学長 倫理学)

宮本正清先生が、かつて教授、学長、理事長を歴任された京都精華短期大学の後身である京都精華大学に一九八九年の四月から人文学部が新設されることになり、あらためて人文主義ということを考えさせられている。

というのも宮本先生は人文主義にふさわしい存在であったからである。いうまでもなく人文主義はヒューマニズムと同義であり、宮本先生にとってヒューマニズムはもつとも願わしい思想であった。いまおられたら、どんなに喜ばれるだろうとおもうと、無念というほかはない。

ヒューマニズム——数十年の昔、それはかがやくばかりの思想であった。ロマン・ロランが苦悩にひしがれた第一次大戦、宮本正清が苦難を受けた第二次大戦のさなかに、ヒューマニズムはどれだけ痛切に望まれ、慕われたことだろう。いたるところで人間性が無視され、人間の生命が大量に抹殺されていた時代であったからである。

だが今日、ヒューマニズムは、それほどにすばらしい思想だろうか。かならずしも実体をともなっていないにもかかわらず人間尊重が当然のこととなっている、この曲りなりにも平和な時代にあつて、ヒューマニズムはもはやかつてのブリリアントな光を失ってしまった。先人達が眼をかがやかせ、胸をときめかせた、あのヒューマニズムはどこへいつてしまったのか。

近年、従来のヒューマニズムに欠陥があることがわかってきた。一つは今までのヒューマニズムが西欧を中心とするものであったからである。古代のギリシア、ローマからルネサンスをへて近代に花開いたヒューマニズムの系譜は、

けつして全人類のグローバルな人間尊重の歴史ではなかった。欧米先進諸国によって人間性を抑圧されてきた人々と  
とって、ヒューマニズムとはいったいなんであったのか。そして近代の日本もまた、それらの国々に伍していたので  
ある。

いま一つは、これまでのヒューマニズムが人間のみを尊重する思想であったからである。それは人間以外の多くの  
生物、いな無生物とも共存しようとするありかたではなかった。そのことが環境破壊、環境汚染の進展につれて、よ  
うやく気づかれるようになってきた。人間が、その生存や生活のために他の生物や無生物を利用し、支配する、ヒ  
ーマン・エゴイズムともいふべき思想は、いま自然界から拒否され、抵抗されつつある。

いっさいのものが生命が宿っているとするとするアニミズムが、新しい意味をもってあらわれてきているのも、今までの  
ヒューマニズムに反省を促すものといわねばならない。だが、それは困難である。ヒューマニズムを放棄してアニミ  
ズムによって生きるということは、人間にとって容易にできることではないからである。せいぜい極力、自然と調和  
し、自然とともに生きることには心がけるといふことであろう。

ともあれ、いまやかつてのヒューマニズムは無効になるところまできている。新しいヒューマニズムがあるとすれ  
ば、それはこのような問題に気づくところから始まらなければならぬだろう。

その新しいヒューマニズムを理念とする人文学部を創設しようとする時に当って、ヒューマニズムを求めて生きら  
れた宮本先生を、もう一度、おもいかえしたい。

## 宮本先生と英語

新道 弘之

(染織家)

今から十数年も前のこと、精華短大に勤務していた頃、春の午後のことだった。かって住んでいた松ヶ崎の家の垣根越しに偶然に宮本先生御夫妻が散歩されているのを発見、恐る恐る声をおかけした。先生は「ヤァー君の家でしたか、実はあまり変わった家なので家内とどんな人が住んでいるのかと話していたところですよ」とおっしゃり、お茶にお誘いしたところ気軽に応じてくださった。

何しろ当時、小生は美術科の若僧、教授会で遙かに拝する宮本教授が我家でお茶の一刻を過して頂くなどは夢にも思わず女房なんかは随分恐縮したものである。というのも我家はアトリエ兼住居のガランドウ、大型ゴミで拾ってきたピンポン台の改造テーブルに再生椅子、天神さんの市で買い求めた伊万里の猪口でコーヒーをもてなす有様で先生はいささかビックリされたに違いない。

でも学者の宮本先生にとっては何とも妙な別世界と思われたのか、我が家の雰囲気が大いに気に入って頂き、何度か夕食に来てくださったり、私達も先生のお宅へ招かれたりするようになった。また私の個展を訪ねてくださった先生は「岳」と題するタピスリーを気に入ってくださりロマン・ロラン研究所に飾っていただくという光栄にも浴したのだった。

さて宮本先生といえど誰でも偉大なるフランス文学者をイメージされるであろうが、意外なことに先生が病床で最後に手がけられていた仕事はタゴール著「The King of the dark chamber」の英訳であったことを知る人は少ない

であろう。私はお見舞に伺った時、奥様から翻訳中のメモを見せて頂いたことがある。これは普通の大学ノートにまるで受験生がやるように、自分で算を引いて単語を丁寧にひろい辞書を引いて対訳を書き込むという几帳面な方法でぎっしり書きこまれてあった。

それはあたかも中学生がはじめて英語の勉強にとりくむような真摯さが伝わってくるもので、私は「へエー先生のように経験を積まれた偉大な学者でも、こうして丹念に辞書を引いて一歩づつ吟味しながら仕事を進めていかれるんだナー」と、この一冊のノートを見せられた時のショックは今だに鮮かに脳裡に焼きついている。

またある日、先生から電話がかかり知人のアメリカ人が古いタンスを処分するそうだから、君にもらってやろうと云ってくださったことがあった。その時に私は一度だけ先生が英語を話されるのをきいたことがある。ゆっくりだと正確な英語できちんとコミュニケーションされていたのには、さすがノと印象的だった。

思いかえしてみると仏文学者の英語の通訳でアメリカ人から日本の古い筆筒を日本人がもらう、というこのストーリーはいかにも先生の国際性を物語っている。

お会いするといつも「ヤァー」といって満面の笑みをたやさず両手をさしのべるように握手をしてくださった先生………。

自分に言いきかせるような話術でゆっくり言葉を選びながら、人間の生き方を語ってくださった先生………。  
あの深い人生の年輪をたくわえられた尊顔は僕の人生で出会った一番美しいお顔である。

台掌

## 宮本正清先生の想出

谷口 知平

(大阪市大名誉教授 民法・比較法)

宮本先生には、日仏学館が九条山にあった頃に親友加古祐次郎氏の御姻戚の関係でお目にかかったように思うが、親しく御交誼に与ったのは仏語主任教授として、大阪市立大学に御赴任になってからである。同僚としての気安さから、フランス語の御指導を仰ぐことになり、国際学会への報告を仏語で書くことを引き受けた場合など、屢々先生に目を通していただいた。方角違いの法学の論稿で随分御迷惑なお願いをしたことだと思いが、先生はいつも(ア)として見てやると心よくお引受けいただき、とにかく外国人に分るだろうという気持で責を果すことができた。

先生は関西日仏学館や京都日仏協会、パリ会などの中心として活躍せられ関西の日仏文化交流についての御功績は実に大きいのであるが、これは先生の温厚な人柄と包擁力の大きい社会的政治的な御性格によるものである。私は宮本先生がおられることによって、オーシュコルヌ先生や関西日仏学館の代々の館長さんを知り、フランス文化への接触の機会を与えられたわけであり、私のフランス法との関係は少くとも関西においては、宮本先生の御蔭であったことを先生を失ってつくづく感ずるのである。

先生はロマン・ローランの研究におけるわが国第一人者としてその名の高いことは、ロマン・ローラン研究所を遺されたことにより、永遠のものとなっているが、フランス紳士のマナーを身につけておられることを、ローラン夫人歓迎会の際拝見して、さすが仏文学の教養を体得せられた大学究であられることを思ったことがある。

私など日本の慣習にそまっている者は、親しい友に会っても握手する手が出ず、まして初めて会う方にはこちら

から手を出すことを失礼のように思い、つい遠慮し勝ちになるのであり、在外研究より帰った友人より、親愛の情を態度で示さないことは不快を示すことになるのだということを聞いていたのであるが、宮本先生はローラン夫人の横顔に頬を近く寄せて挨拶をされ、その優雅な敬愛の情を表す態度、その極めて自然なのに敬服し身を以てフランス礼儀を示されたのであった。

仏文で日本の戸籍の説明を書くにつき訂正をお願いしたとき、自分はできぬから日仏学館のマイエー館長に頼めといわれたのが、お目にかかれた最後になった。既に御病気の徴候があったのであろうか。その後お訪ねしたとき門のベルを押ししたのに対し、しっかりした先生のお声で応答があった。しかし、奥様にだけお目にかかり、先生にはお目にかからぬままに辞去した。老人性胸部疾患だということで、自らお気を使われ面接を辞退されたものであろうが、こんな折にも正しい礼儀を身を以て示されることに感激した。それにしてもそのままに一生お目にかかれぬこととなり、まことに残念痛惜の至りである。



ローラン夫人への手紙の下書き、  
メガネ、万年筆

## 追 想 — 宮本正清先生のこと

ユベール・デュルト  
（フランス極東学院研究員）  
法宝義林編集長

宮本先生について追想することは、先生がその生涯を捧げられた東洋と西洋の友好に深く関わる幾多の思い出を記憶に想い浮かべることに他なりません。

しかしながら、私の第一の思い出と言えば、先生あの明るいお顔にしばしば咲きこぼれた微笑です。先生が数々の苦難を体験されてきたことは確かですが、先生の輝くばかりの陽気さは、全ての人々にとってと思いますが、忘れ難いものです。

それは先生の御出身が南の国であることに起因したのでしょうか。先生は土佐、現在の高知県の出で、そこは四国の南側斜面に位置し、日本列島の他の諸国より訪れる人々はその地の愛すべき物憂さに心を打たれるのです。願わくば、現在四国と活気ある本州とを結んでいる好ましからざる連絡橋のため、古来からの生きる喜びが損われませんように！ 既に鳴戸と徳島間の沿岸地帯が対岸の大阪工業地帯の延長と化してしまいました。

宮本先生が世の中に撃って出たのは、一平和主義にたいしてこのような言い方が許されますならある偉大な大阪人の傍らでのことです。先生は、フランスと関西の友好の船首像であり、日本の工業化のパイオニアであった貴族院議員稲畑氏の秘書でした。稲畑氏は人生を楽しむ垢抜けた人で、前世紀末リオンで絹織工たちと一緒に働いたことを好んで思い出していたようです。

私自身が日本へ赴く以前、既に私の「指南役」であったローズ・ウィユ嬢より先生のことを聞いており、お会い

できるのを切望していました。ウイユール女史はブリュッセルの王立美術歴史美術館極東部の学芸員で、当時高名な梅原末治教授の指導する京都大学考古学研究室に留学生として在学していました。それは第二次大戦に先立つ数年間のことで、そのころまだ希であった学生達、そしてさらに少ない外国学生達に対する警察での諸々の手続きは煩雑なものでしたが、それも暖かい友情によって償われたのです。しかし、日本を破局へと導こうとしていた体制が、先ず初めに個人主義者の日本人を苦しめていました。

一九六一年から一九六三年にかけ私自身日本で勉強した折、今度は私が宮本先生と御家族の厚情に浴しました。さらに嬉しいことに一九六四年にブリュッセルでウイユール女史と宮本先生に再会しました。ウイユール女史は旧友である先生とお嬢さんを、庭と陽影を落すベルの谷間に面して日本式にすっかり開かれた家にお迎えしました。この再会の場のすぐ近くに、とても魅力的な美術館、ピブリオテーク・ヴィトキアナと呼ばれる装丁史博物館が建てられています。

宮本先生は日本で、とりわけロマン・ロランの専門家として著名で、その幾つもの著作を日本語に翻訳なさいました。この分野での先生の交流は、フランス国内よりも国外の方が一層活発ではないかと思える、ロマン・ロラン「インターナショナル」に大部分関連したものでした。ある警句に「ガンジーとタゴールの友で、トルストイの信奉者で、ゴッリキーの友でもあるものは、彼のオリジナルの言葉で読むよりも翻訳の方が一層読みやすい」と言うのがありました。偉大なシナ学者のポール・ドミエヴィルはこの悪意にたいして憤慨していました。彼はこの警句にロマン・ロランの平和主義のメッセージからフランスの青年達を引離そうとする手管を読みとったのです。とは言え、彼の優美さに欠ける多くの小説よりも、その高潔な生涯、書簡、インドへの愛（宮本先生と共有するもの）の方に私が惹かれるのを許してくださいますように。

ロマン・ロランは、一部はその翻訳家宮本先生のお蔭で、日本に於いて重要な役を果たしてきましたし、今後もうでありましょう。今日の日本で特筆すべきことは、その平和憲法です。日本憲法の平和条項は、今後ますます他の諸国でも採択されるよう切望されるのですが、その威光を實踐するにはあくまで日本国民の平和愛好の精神状態によって支持されていかねばなりません。ロマン・ロラン自身はこの点よりすれば、*「闘争から超然とした」*人でインスピレーターとして留まっています。従って、宮本先生が設立したロマン・ロラン研究所が近々再開されることをとても嬉しく思います。付言しますと、平和条項は決して懸念の必要がないものではありません。宮本先生はそのことを身をもって示されました。先生は旧友のジャン・ピエール・オーシユコルヌ氏とともに一九四五年、窮地に追いつめられた日本軍国政体により投獄されたのです。

宮本先生が数十年間にわたり決定的役割を果たされた関西日仏学館や、フランス極東学院（「方宝義林」研究所）、さらに、将来の九条山センターと同様、ロマン・ロラン研究所は単に日本とフランスの掛け橋となるだけでなく、国際的意義を持っています。宮本先生がロマン・ロラン研究所の書庫と研究室を御生前の住居に設置され、現在京都の最も風光明媚な場所の一郭を占めるよう取計られたのは、仏教用語を引いて付言しますと、それは先生の善き業であります。かつてこのロマン・ロラン研究所に程なくなることになっていたそのお宅の露台に座し、宮本先生御夫妻と一緒に大文字の火を目の前にして瞑想したことは、私の、お盆の最良の想い出の一つです。

（大出 学 訳）

## 慈父のような先生

直木 孝次郎

(大阪市立大学名誉教授 日本古代史)

宮本先生には、私が大阪市立大学文学部に在職していたとき、いろいろお世話になった。一八九八年(明治三一)生れの先生は、一九一九年生れの私の二十一歳の年上である。私は神戸の生れであるが、先生はお若いときしばらく神戸でお暮しになったことがあるという。私の父は明治の末に早稲田大学を卒業したが、先生も早稲田のご出身である。私は先生に慈父に接するような思いを抱いていた。実際、先生のおだやかで深みのある風貌は、人の心をおだやかにし、寛容にする力があった。大阪市大文学部の教授会では、多弁な方ではいらっしやらなかったが、無駄な議論を沈静に導く徳があった。ボン・サンスとはこういうものかと思っただけである。

一九五〇年代のなかごろ、文学部のなかで、ある紛争が起った。事件の渦中に置かれた私たち当時若手の教員数名は、京都の先生のお宅を訪ねて、私たちの意見を聞いて頂いたことがある。先生は賛成して下さい、

「若い人は純粹でいいなあ」

とおっしゃられた。事件は私たちの希望する形で解決し、しばらくして教授会には助手以上が参加するように規則が改められた。現在はそういう大学は少なくないと思うが、当時としては他にほとんど例のない民主的改革であった。

一九六〇年(昭和三五)四月に私が『持統天皇』という書物を出版して差上げたところ、逐一目を通して、内容も面白いが、文章がよい、と褒めて下さった。同じ年七月に『伊勢神宮』(藤谷俊雄氏と共著)を差上げたのに対しては、高野山からつぎのようなお便り(ハガキ)をいただいた。

お便り有難く存じます。民学研（直木註、民主主義学者研究者の会の略称）のこといろいろ御配慮、恐縮に存じます。先頃いただきました御著書、専門の必要の書以外、唯一の携帯書として、当地で拝読しております。当山は、室内では日中も暑気を覚えず、仕事ができるのが何よりのたのしみです。先は右御礼迄。敬具 宮本正清  
日付は元号で記さず、一九六〇年七月卅一日、とある。そしてそれから間もなく、先生訳の「魅せられたる魂」岩波文庫版全十冊をいただいた。その第一巻の表紙裏に「宮本正清、直木学兄恵存」と署名して下さったのが、何よりの記念である。

先生がなくなられてもう六年になる。先生から賜わった御恩に対し、何のお返しもできないまま、無為に日を送ったことをお詫び申上げる。

## 大地に平伏して

中江 要介

（原子力委員、元中国大使）

人間は神様ではない。だから、往々にして間違いを犯す。たとえば、忘れてはならない人のことを、いつの間にか忘れてしまう。あるとき、ふと、その人のことを思い出す機会が与えられると、穴があったら入りたいような気持で恥じ入り、悲しみ、悔やみ乍ら、その人のことを追憶し、詫び、大地に平伏す。

いま、私は、そんな気持で大地に平伏し、その人のことを追憶し、詫びている。

その人のことを思い出す機会を与えて下さったのは、他ならぬ宮本エイ子夫人、といっても、私はエイ子夫人とは

一面識もなく、文字通り無縁であった。それは、言う迄もなく、私が、忘れてはならない人のことをいつの間にか忘れてしまっていた、その罰である。

そのエイ子夫人からの一通のお便りが、突如として、私の心の大きな部分に、宮本正清先生を甦らせ、そのころのことを鮮明に思い出させずには措かないのである。

そのころ……それは、今から四十三年前、敗戦に伴い価値観が根こそぎ倒錯した昭和二十年から二十一年（一九四五年から四六年）にかけての頃である。

学徒出陣という勇ましい名の下に戦争に徴発された私は、負け戦さの果て、復員した。さて、どうしようかと、一年余り考えた挙句、外交官になって、世界に再び愚かな戦争の起らぬように微力を尽くそう、と決意した。

外交官試験を受けるため、フランス語の勉強を再開した。私は、旧制第三高等学校の文科丙類を卒業していたので、フランス語が、いわば、第一外国語であった。従って、戦後のフランス語の勉強は、敵性語として意識的に忘れさせられていたフランス語を意識的に思い起こさせるといふ大事業であった。私は、京都の関西日仏学館に通った。

ロベール館長の下に、オーシュコルヌ先生、折竹錫先生、このお二人は三高時代からの恩師でもある。そして、新たに、宮本正清先生を師と仰ぐことになった。私の勉強は、目標がハッキリしていた。即ち、外交官試験突破、そのための外国語試験準備、特に、仏文和訳と和文仏訳の力をつけること、だから、ロマン・ロランは、正直いって、どうでもよかった（何と浅はかな／＼と思われるだろうが、そういう世の中であった、悲しいことに）。

ロマン・ロランを学ぶ代りに、私は、新聞の社説の、面白そうな部分、特に外交に関するものなどを、フランス語訳にしては、宮本先生に添削して戴いた。それだけが、私の勉強であった。この功利的な、我儘な生徒を、宮本先生はイヤな顔一つせずに丹念に教導して下さった。

私は、昭和二十二年末、外交官試験に合格した。宮本先生のお蔭である。そして、昭和二十七年七月、外交権の回

復した日本の、最初の在フランス日本国大使館の「外交官補」として赴任した。プロペラ機の南廻りで、機中二泊の上やっとパリに着いた。

パリでのフランス語の先生は、マダム・カミュであった。当時大使館館員の幾人かが、マダム・カミュのルソンを受けていたが、私にとっては、それだけではなかった。この恥知らずで恩知らずの生徒が、いよいよパリに赴任することになったと、宮本正清先生に恐る恐るお便りを書いたところ、丁重な祝辞と共に、二通の紹介状を賜わった。一つは、ロマン・ロラン未亡人あてで、もう一通は、マダム・カミュあてであったのだ。

マダム・カミュは言った。

「ムッシュウ・ミヤモトは、得難い日本の友人です。それまでフランスに勉強に来たこともないのに、会ってみると、素晴らしいフランス語を話し、読み、書き、ロマン・ロランを深く研究していることに感心してしまいました……」

そのマダム・カミュは、私の拙いフランス語を根気よく訂正し、教えて下さった。そのマダム・カミュの後には、いつも、宮本正清先生の温顔があった。その温顔は、しかし、鋭い眼差しを中心にひろがっていた。いつか、この人の師、この先生をパリにお迎えすることがあるに違いない、そのとき、私は、立派な日本の外交官として先生の前に直立、最敬礼をしよう……と思っている中に、二年でパリを去り、あと、東京——リオ・デ・ジャネイロ——ニューヨーク——東京——サイゴン——パリ——東京——ベオグラード——カイロ——北京と歩いて外交官生活四十年、昨年秋季退官した。

その間、忘れてはならない人のことを、いつの間にか忘れていた。宮本先生が亡くなられたのは、私がカイロに在動していた頃のことだ、迂闊にも全く知らなかった。今、思い出す機会を与えられて、追憶し、大地に平伏して、貧しい心を恥じ、恩知らずを詫びている。

それにもまして、ロマン・ロラン夫人あての紹介状が、とうとうそのままになっていることも、私の心を、改めて

痛めている……。

宮本先生、おゆるし下さい。

## 宮本正清先生とロマン・ロラン

中川 久定

(京都大学教授 フランス文学・思想)

宮本正清先生を個人的に存じあげていると申しあげられるような資格を、私はもっておりません。京都大学に私が入りたての一九四九年(昭和二四年)頃、宮本先生は関西日仏学館の主事をなさっていましたから、百万遍界隈で、そのお姿はよくお見かけしていました。しかし私は、その当時学館に出入りすることもなかったので、当然、宮本先生のご面識をえるような機会もありませんでした。

最初のきっかけはどうかということだったのでしようか。名古屋で一〇年間勤めたあと、京都に移った私たち夫婦は、時々、日仏学館のセリエ館長から、学館の館長居室で食事招待されることになりましたが、主賓はしばしば宮本先生とエイ子夫人でした。宮本先生がまだ嬰孩としていらっしゃった時代のことです。

しかし、こうしてお目にかかる以前から、宮本先生のお仕事は私にとっては決して未知のものではありませんでした。宮本正清という名前は、大学に入る前後に読んで、強い印象を与えられていた「養徳叢書」外国篇の一冊、ロマン・ロラン『ピエールとリュース』の翻訳者として、私の記憶のうちにとどめられていました。「ピエールとリュース」から受けていた強い印象は、その後宮本訳の翻案を映画化した監督今井正の作品「また逢う日まで」一九五〇年

(昭和二五年) によって、さらに増幅させられました。

今から八年前のことでした。必要があつて、私はロランの「ヴィヴェカーナンダの普遍的福音」の原著を学校の図書館で検索したのですが、見当りません。万一、と思つて當つてみた「ロマン・ロラン全集」(みすず書房)の、ちようど出たばかりの第一五卷(一九八〇年)のなかに、幸運にも、宮本正清訳「ラーマクリシュナの生涯」と「ヴィヴェカーナンダの生涯と普遍的福音」が収められていました。宮本先生が残されたお仕事の——そして先生があとの時代の人間に託そうとされていた事柄の——大きな意味が私にはつきりと理解できたのは、その時からです。

インドの伝統が生み出した二人の巨人ラーマクリシュナ(一八三四—八六年)とその弟子ヴィヴェカーナンダ(一八六二—一九〇二年)の生涯と教説に捧げられたロマン・ロランの二冊の著書。——宮本先生によるこれらの本全体のご訳業が、記念碑的な労作であることは申すまでもありません。古く長い伝統をもつインド哲学、一九世紀におけるアメリカ、イギリス、ヨーロッパの思想的・宗教的潮流、プロチノスに始まり、偽ディオニシウス・アレオバギタをへて、一七世紀フランスにいたるキリスト教神秘主義の伏流、現代の比較宗教学、および現代の心理学・精神分析学の発展——これらすべての領域に関する著者ロランの深い知識に彩られた原著を、これ程分かりやすく訳しおおすために、どれ程の努力が費やされねばならなかつたことでしょうか。

ですが、私がいいたいのはそのことだけではありません。二冊の本の「訳者のあとがき」を一読すれば明らかにように、この本のなかには、宮本先生ご自身の理想が、ロランのことばを通して、はっきりと語られています。

——「ヨルダン河とガンジス河」とを「合流」させること。「二つの河が、合流——(それとともに多くの河も)——して広くなつた河床をともに流れて」行けるようにするために(訳書、二二二ページ)。新生したロマン・ロラン研究所が、この理想に忠実に、それぞれ異なる伝統に属する諸文明の出会いと、対話と、合流の場所とならんことを。

宮本先生は、大学での公務以外は、翻訳のお仕事に埋没するようにしてその一生を終えられました。——ロマン・

ロランは、次のように美しいことばを書き残しています。「もっとも偉大な人間というのは、自分自身のカルマヨーガ〔善なる行為の道〕を実現することさえ断念して、他の人々がそのカルマヨーガを実現するのを援ける人々である」と（訳書、三八一ページ）。よき書物のよき翻訳者こそ、他のひとびとのカルマヨーガの実現のために、自らのそれを断念することさえもいとわぬひとなどではないでしょうか。

## 私の宮本先生

長谷川 治 清

（京都精華大学教授 経済学）

心に残る思い出が二つある。その一つは、お会いしたときに、いつもにこやかな笑みをたたえられていたことである。あの笑みはどこからきたのだろう。人生を歩まれるなかで、ある精神的な境地に到達され、心のやすらぎをえられた方の笑みのようであった。そして、そこには暖かさがあり、愛があった。それ故であろうか、現代の人間関係に嫌気を感じ、希望を失った冷たい心に、生きる力を与えて下さった。同じように生れた人間のなかに、このような人がおられることに気づいたとき、人間不信の雲が遠のき、人間や社会に対し、積極的な希望をもたせてくれる青空があらわれるのである。あの笑みは多くの人々の心に今も希望を与えているにちがいない。

もう一つの思い出は、先生が京都精華短期大学（現・京都精華大学）で学長をされていたときのことである。卒業式で「戦いは人に対してではなく、自分に対してである」と話された。なんと厳しいお言葉であろう。先生自身もこの言葉のように生きておられたにちがいない。言葉そのものは欧米的な響きをもつが、私にはそれがなぜか東洋的な

内容をもつものに感ぜられた。私たちは、欧米社会の支配的な競争原理に強い影響を受け、競争が常に友人や他人に對してであることを意識させられる社会に住んでいる。戦いは自然や隣人に對してであり、それが人類の進歩に至ると信じてきた者にとって「戦いが自己に對してである」という考えは価値観の大きな転換を意味している。先生のの仕事は、生き方そのものに示されており、隣人との競争にかりたてられる現代社会に警告を發しているように思われた。

ロンドンにて

## 宮本先生と私

長谷川 正海

(医師、庭園美学)

宮本先生と私との出会いは、今から約五十五・六年前のことである。大学の医学部へ入った私は、医学論文の解説や作成の上から、英独仏の三ヶ国語は、当時最小限度の必須外国語とされていたので、仏語の習得を思い立って九条山の日仏学館へ入校したのである。

と云うのは、それまで私は英語とドイツ語としか知らなかったからである。そこで先生と生徒という関係で宮本先生との結び付きが生れたのである。医学部を卒業するまでの四年間を真面目に通った私は、語学力はともかく、同館で多くの知人ができたのは何よりの収穫であった。卒業後は本職の医学研究に多忙で語学を楽しんでいる暇がなくなり、必然的に学館との縁は切れた。しかし学館も亦聽て九条山から医学部に近い今の地に移ったので、時々夏期講習を受ける程度には有縁であったのである。そのうちに支那事変、第二次大戦と世の中は物騒な時代となり、私の人生

もその世相に翻弄されて料余曲折していた。先生と生徒と云う関係以外に、特別な個人的関係ではなかった宮本先生との間も、勿論のこと疎遠になっていた。

戦争も終わって二十年、学館と疎遠になって三十年程経ったある日、突然先生から電話があつて驚かされた。なんでもフランス婦人の筋腫手術依頼のことであつた。

それは電話だけのことで済んだが、次に先生と顔を合わせたのは、マルシャン老館長夫人来日の歓迎打ち合わせ会合のときである。ステーションホテルで先生始め羽田先生や原先生など五・六人集まつた時である。何十年振りに集まつた面々はすでに老境の人達であつた。四十何年に近い年月が過ぎていゝるのだから当然である。その時先生はお住いが私の診療所の近くであることを話された。そしてこの顔合わせを機に、以後先生は屢々私の診療所へ来られた。いつもの温厚な笑顔と話し振りで楽しそうに、話すこと自体を楽しんでおられた。私自身も、すでに本業の医業を副業化し、本格的な入院手術は全廃して外来だけに限定し、道楽の庭園学に三昧の境であつたので、度多く先生のお宅へお邪魔した。宮本先生ご夫妻を介して多くの外国人とも知り合いになり、忘れ得ぬ多くの思い出もできたし、いろいろ見聞を拓めることもできた。

こうして、九条山日仏学館で初めて先生に仏語の手ほどきを受けてから、疎遠な時が何十年か流れた後、再び親しく温顔に接し得た喜びも束の間で、数年後には、先生は病床の人となられた。老人性肺炎や老人性結核が増悪し、病床に横たわること五年にして、先生は遂に不帰の人となられた。

先生の日仏文化交流への功績は、フランス国よりの受勲によって知られるし、先生とロマン・ロラン研究は切つても切れない関係で、世界文学全集の「魅せられたる魂」は今尚多くの人に愛読されている。先生からは、親交のあつたタゴール翁やロランの話をよく聞かされて感動したものである。私は厚かましくも、先生に先生のオリジナルなロマン・ロラン論を著述されることを勧めていた。先生の叡知も何時かはそれを意図されていたと思う。しかし

先生の片肺は休火山ではあるが、レ線像は正に廃虚であった。一寸したことが大事に至る可能性を常に抱えておられた。一寸した風邪から肺炎へ、そして老人結核の復活へと、齡八十を越して病勢は急速に進んだのである。

先生のなくなられた後、ロマン・ロラン研究所も一時休止されていたようであるが、今再び活発な活動に入っていると聞く。先生の喜びこれにすぎるものはないであろう。

京都に今活躍している日仏文化交流の組織として日仏協会や日仏学館があるが、その創立や発展には、いづれも宮本先生の大変な熱情があづかっていることを思えば、先生は大恩人である。協会の発展や学館の隆盛はまた先生の靈を慰める所以である。ロラン研究所や協会、学館の発展を祈ること切である。

## 宮本先生の「若さ」

原田 武

(大阪外国語大学教授 フランス語・文学)

宮本先生について語るとすれば、何といってもロマン・ロランに注がれた、あのひたすらな情熱に触れないわけにはいかない。それは先生のほとんど全生涯にわたって流れつづけ、生活のあらゆる面にいきわたるほどの強さであった。人生のさまざまな問題を考えるにあたって、先生はまずロマン・ロランに問いかけ、ご自分のうちに深く蔵されたロラン的なものに判断の基準を求められたように思われる。これほどまである作家・思想家を同化し、自己の血肉と化した研究者はちょっと他に例がないのではないだろうか。

さらに宮本先生の場合、活動の範囲がただ文学研究にとどまっていなかったのを、私はことのほか貴重だと思う。

先生が関西日仏学館の創設と発展にどれほどの努力を傾けられたかは、エイ子夫人の委曲を尽くした労作に明らかである。私は九条山の時代は知らないけれど、東一条でフランス語を学び始めた一人であり、あの瀟洒なフランスふうの建物に足を向けるにつれ胸の高まりを抑えきれなかったものだ。戦前の暗い時代から今日にいたるまで、関西日仏学館はいわば自由と理性の灯台でありつづけてきた。ここで学ぶ者は多少とも先生の恩恵を蒙っているのだ、ともいえるであろう。

そのほか、先生が日本におけるロマン・ロラン研究の広汎な組織化に多大の貢献をされたこと、大阪市立大学に籍を置かれてからも大学行政のうえでも尽力を惜しまれなかったことは、私がここで事新しく述べるまでもない。先生にとつて、人間は研究者であると同時に、一人前の社会人であることが肝要なのであった。特定の作家に傾倒しつつもそれを自分だけの関心にとどめておかないこと、必要とあれば社会のただなかでも十分に活動をなしうること、これは一つの立派な生き方だと思ふ。

しかし、先生がいくら現実立脚した活動家であられたとしても、胸のうちには若々しい情熱、あえていえば夢見る青年のおもかけが晩年にいたるまで宿っていたことを、私はとくに強調しておきたいと思う。先生がつねに快活にして座談に長じ、世上の万般におよんで理想家として鋭い観察を下されていたのは忘れたい。先生にはいくつもの詩作があり、詩を作るのをひそかな楽しみとされていたようだ。私は思い切つて、詩人であるのが宮本先生の本質だと考えてみたい気がする。

今にして思えば、むしろ歳をとるにつれ、先生は若さの度を強められたようだ。自分が馬齢を重ねてみると、老いて若くあるのがなかなか困難だと気づく。他界されて早くも六年になる宮本先生を偲びながら、私は今、若さをむしろ到達点として、いわば人生を逆に生きる生き方を、自分も大いに学ばねばならないと思つている。

## 宮 本 先 生

松 下 明 治

(洋 画 家)

先生は生涯の仕事としてロマン・ロランの研究をされた。「魅せられた魂」の翻訳は先生の大きな仕事の一つである。その全訳を終られた後記に「訳筆を描いて」一九四〇年として一文を残しておられる。大体つぎのように書いておられる。

十年の長きに渡ってこの仕事を続けたが、十年といえれば自分の一生にとってけっして短い時間ではなかった。自分は常に変ることない情熱をこの仕事にさへげた。自分にとって荷の重過ぎる坂道であった時にも片時も手離そうとはしなかった。この翻訳は自分にとって常に一本の杖であり、頼りであり、慰めであった。朝はひとときでも早く、夜は少しでも多くこの仕事に時を心して過ごした。

この一文にも先生の研究者としての真摯な毎日を見ることが出来る。なお続いて先生は長きにわたったこの仕事の完成の喜びと安堵の中にも自分のこの仕事が原作を充分に読む人々に伝え得る内容に出来ただろうかどうかと反省を忘れない謙譲な良心に先生の人柄生き様を語られているように思うのである。

\*

先生と私の出会いは私の父の紹介である。古い話で私もあまりくわしい事は知らないが、日仏学館がまだ九条山に在った頃、私の父が友人で親しくして頂いていた方に松岡新一郎さんといわれる方がおられ、日仏の親善に大変尽力され功勞のあった方だと聞いていた。その頃は先生は未だお若く、松岡さんのもとで一緒に仕事をしておられ、そんな関係

て父は先生とも親しくさせて頂いていた。私が東京美術学校洋画科に入学、洋画家をめざしたことを知って松岡さんは大変喜んで下さって、息子さんのフランス行きは自分が引き受けると言っていたが、私が渡仏する頃には松岡さんは亡くなっておられ、結局私のフランス行きは先生に大変なお世話になってしまった。

昭和二十八年当時は海外に出るのが、まだ非常に困難な時分で、両方の国に身元引受人を必要としたり、フランスでの学校の入学証明、費用、何やかやと書類を必要とした。パスポートひとつ取るにしても大変な時代であった。何しろ京都からは未だ海外渡航は二人目というような戦後であった。

先生は事に当って首を少しかしげ慎重に考えてから行動されるといふ、いつものポーズで色々と御指導いただいた。それは単に渡航についてのことだけでなく、一介の画学生であった私に対しても、学業の友として共に語って頂いた。留学に対する態度、フランス文化の吸収、外国生活。

\*

先生の見送りを受け神戸からフランス船ラ・マルセイエーズ号に乗船した。私は主にバリーに住んだ。二年間の滞在だったが、先生から色々お話し頂いてたことは充実の日々を過ごすのに役立ったように思う。あちらで得たものは静かに自分の仕事の中に生かしてゆきたいと思っている。

\*

船がシンガポールに入港して先生のお便りを手にした時には、あらためて先生の温さを感じることが出来た。

## 宮本正清先生の思い出

宮崎 市定

(京都大学名誉教授 東洋史)

宮本正清さんは日仏学館で、私のフランス語の先生であるが、どうも先生というような気がしない。これは宮本さんがどこまでも遠慮深くて先生ぶらない、反って逆に私を先生など呼ばれるくらい謙虚な方であるせいであるが、また別に故廉子夫人が私の家内と学生時代、同窓同寮の誼みで親しく往来して居り、そのため裏側から先ず知りあっていたという関係もあった。廉子（実名廉）さんは宮津出身の大審院判事加古虎次氏の三女で、次兄の祐二郎さんは彼の京大の瀧川事件に殉じ、貞先きに助教授を辞任された。同郷の名家同志で、廉子さんは前尾繁三郎氏と許嫁の仲であつたが、前尾氏が胸を病み、長期療養に患念したことから、婚約解消を通告された。廉子さんは何事にもはっきり決めることが好きで、お名前の廉はどういう字かと聞かれた際、廉潔の廉と言っても通じない、低廉の廉と言っても通じない、たまたま新聞広告を見て思い当り、売残り品大廉売の廉だと言ったら、すぐ分って貰えたと、大笑いで話された。正清さんとの結婚には家内も相談に與つた。お見合いのあとで、「貴女こそ私の理想の女性、若しことわれるようなことがあれば、毒を飲んで死んで了う」と言いよられたという秘話もある。お子さんが生れる前、女なら小枝子、男なら周作と、豫め定めておかれたのがそのまま実現出来た。周作は周作人にヒントを得たものである。この命名は正清さん独自の発想で、廉子夫人は一言も口を挿む余地がなかった。稚子さんの場合も同じ。

私が入門したのは昭和十年の後期で、翌年フランスへ東洋史学研究のために渡航することが定まり、泥縄式語学の必要に迫られて駆けこんだ次第。当時日仏学館は九条山にあつて、蹴上から長い坂道を登ってやっと辿りつく。教室

の片側はこつこつ岩のつき出た断崖に面し、窓から空が望めない。教科書は当時の館長のマルシャン先生の著わしたデュボン一家、*Famille Dupont*で、この本は実によく出来て居り、今でも手許において役立てている。薄暗くなつて帰りかけると、庭で草花の手入れをなさっていたマルシャン先生が、オオロンバ・ムシュー *Au revoir Monsieur* と声をかけて下さるから、此方もオオロンバ・ムシューと答えて坂を下りた。往復の道程が長すぎるので、あまり長く続けられなかった。

二年ほどの後に帰国し、暫くしてからお訪ねした時は、学館は工芸専門学校が移転した跡地、今の所に立派に完成していた。宮本さんは主事として、この学館の建設に骨身を削って尽力され、その苦勞話を委細に話して下さった。日本政府から土地を借りた上なので、政府に誓約書を提出し、この学館を引払う際には、建物を全部取壊して、まっ平な土地にして返却します、という所まで書かされた。こんなことには、もう二度と関わりあうのは真平ごめんです、と笑つて居られた。

戦争中は敵性国家ということで、更に一層の辛苦を重ねられた。特高警察がお宅へ踏みこんで来て書棚を検査し、赤い表紙の本を見つけて押収し、アカの嫌疑で拘留所にぶちこまれた。拘留六十日間にも及び、夫人はその間亀岡へ避難したが、京大教授の落合太郎先生が心配し、保証の一札を入れて貰い受けて帰った。これは戦争末期のことで、私などまでが召集にあり、何も知らなかった。その戦争が終ると今度は戦勝国の側で、遽かに明るい時代が訪れた。そういう際に宮本さんはよく不遇な文化人の世話を見られた。石川淳などもその一人で、私も学館で紹介されて話合つたことがある。

宮本さんが学館からも、協会からも引退されると、段々御無沙汰を重ねるようになった。ロマン・ロランでは私などには全然とりつく島もない。今度そのロマン・ロランの会からのお命づけで、拙文を草して、会友諸賢と共に宮本さんを偲ぶことになった。せめてこの文の標題にでも、先生と呼ばせて頂くことで、これまでの長い間積もり積つた

借金のいくらかでもお返しした気持ちになりたいと思う次第である。

## 情 熱 の 人

山田 忍

(関西ピアノ専門学校校長)  
ピ ア ニ ス ト

宮本正清先生と初めてお目にかかったのは、私がフランス留学から帰国して大阪日仏協会の会合に出席した時であった。

ロマン・ロランの研究で著名な、このフランス文学者を以前からお名前だけはよく存じ上げていたが、じかにお会いした印象は物静かで温厚で包容力があり、またプロフェッサーとしての威厳を持ち合わせた方とお見受けした。以後亡くなられるまで、私はフランス芸術文化についてわからないことがあるとおたずねし、広範囲にわたっていろいろ教えていただいた。大変お忙しい方であったから、それは大阪においでの際に時間を割いていただいたり、私が銀閣寺のロマン・ロラン研究所をお訪ねしたり、長い間おつきあいをさせていただいている間に、先生のごことが少しずつ理解出来るようになった。そして先生も私のことを可愛がって下さった。

私が最初のエッセイ集を出版する時に、「僕が序文を書いて上げましょう」と、おっしゃって下さり私はいたく感激した。

ただ一つの共通のテーマが私たちにはある。彼女のフランス音楽と、私のフランス文学への愛着である。私たちは、いつ会っても、どんな問題について語っても、本質的なことでは変わらない。私は、いつなんどきでも、なんの

懸念もなしに出かけて、彼女の意見を聞き、率直に私の考えも述べることができ、その上で、もっとよいイデーや方法がないものかと考慮もできるように思う。芸術に対するひたむきな傾倒の仕方。どうしてそんなに好きなのか？

「好きだから、好きにちがいない」それほど単純で、明瞭で、深いものはない。」

序文にこんなふう書いて下さった先生と私は、フランス芸術を語り合い、それを模索し、追究することに、この上もない幸福を感じていたものである。

大阪市立大学を退かれた後も、先生は常に若々しかった。

大阪へ出て来られる時は、必ずアポイントメントの時刻より半時間ぐらいは早い目に淀屋橋に到着され、中之島公園や御堂筋を研究課題について考えながら散策するのだと言っておられた。

ボートと過ごす時間をもつたいないといった様子で、とにかく常に時間を上手に使う方であった。

「僕は、いつも三十代の青年のつもりです」と、よくおっしゃっていた。このことは、ロマン・ロランに傾倒し、その道にかけてはヴェテランでいらっしゃる先生らしいお言葉である。ロランも精神的には万年青年であり、情熱の人であったから。

関西日仏学館をこよなく愛し、日仏文化交流に尽力された先生が、いつも言っておられた言葉を、あのおだやかな表情と重なり合うようにして今も思い出す。

「山田さん、芸術の道に終わりはないんですね。何かに取りつくことはやさしいが、それをやり遂げることは、どんなに困難なことか。そのためには、私はいつも前向きの姿勢でぶつかっていくことしかないと思うんですよ。」

宮本先生は、いつも大胆に、それでいて謙虚な姿を崩すことのなかったフランス文学の大家であった。

## 心の人、宮本正清先生を偲んで

山口 善造

(山口特殊電線株式会社社長)

宮本正清先生にはじめてお目にかゝったのは、たしか昭和十二年の夏であったと記憶している。昭和十年より同十二年にかけて、欧米、特にフランスに服飾美術等の研究で滞在して、支那事変の為帰国したのがこの頃であった。懐しい彼の地の想い出をしのび、且又幾分でも身についた仏語に親しみ続けてみたいとの軽い気持で、仕事を終えてサッパリした気分で吉田の日仏学館の夏季講座に、一ヶ月程大津より通ったのが、先生とのご縁のはじまりであった。それ以後は、自分の忙しい研究や仕事に追われて、学館で仏語に親しむ機会は何れも皆無で、先生には何かの由りに拝眉の歡びには恵まれつゝも昭和二十年を迎える事になった。

戦争中には実に色々の事があり、九条山で、それも先生同様に親しくして頂いたオーシュコルヌさんご夫妻との奇しきご縁もあり、難しい時代の乗り切りに、お互に浮身をやつしたものである。そして昭和二十年の秋。この年は日本国民にとり永久に忘れ能わざる年であり、又私自身と宮本先生にとっても今迄のご縁が、更に深まる想い出深い年とはなつた。それはこんな出来事があったからである。

私がかねがね大変懇意にさして頂いていた南禅寺の稲畑勝太郎翁が、私に是非日仏協会の会員になるようにいわれ、ご自身で会館に案内され、直ちに宮本先生をお呼びになり、その日の特別の幹部の会合の席上、自分が皆々に山口君を紹介するから、手続きをとって欲しいと発言されると同時に、大阪の岩井さんや京都の山田九蔵さんのお顔などお一人づつ眺めまわし乍ら、いとも懇切に私の事を話されたのであるが、特に私にとって印象の深かったのは、自分の

伝記が一部山口君に署名入りで贈ってあるが、この記事の内にリヨンのことが随分詳細に書かれているが、それでも尚々精しいことは多々書き足りぬ点があり、久しく遺憾に思っていたが、自分同様若い時に同地に滞在して、色々研究していた山口君が、この古い都市で精励していた当時の事どもをも理解し、又市街にも精通して居て、後生稲畑のリヨンに於ける在りし日を想起するに一助となる仁、これが日仏親善に貢献する処ともなり、フランスを愛する事自分におとらずと思うので、この協会に入って貰うことにしたと、切々と説かれたのをすぐ傍で聞いて居られた宮本先生は、いたく感動された。この時以来先生とは終生心の交りが続くことになった次第。或る時は偶然出会った大丸での立話だけであきたらず、地階のコーヒー店で二時間余も話しこんだり、又或る時はロータリーの例会後、たまたま話題が心の問題に及び、これまた時を忘れて語り合った想い出など、今回顧して懐しさの情禁じ能わず、さすが先生はロマン・ロランと一つの人なりしと確信しています。

数々の先生との交りの内でも、私にとって、いつも先づうかぶ面影は、温顔極り無き心の人としてのそれである。実に宮本正清先生は、ご生前心に触れるお話しのお話の至って好きな、又感激されるご仁であった。



ロランのカイエ

## お世話にばかりなつた話

井 土 真 杉

(放送局勤務)

一九五九年一月十七日は、日頃温暖な三重県では考えられないような寒い日であった。この日、宮本先生は津市に來られ、「津高校ロマン・ロラン友の会」のために講演された。

よく考えて見ると、きわめて近しくおつきあいいただいていたように感じているのに、実際私が宮本先生にお目にかかったのは、あとにも先にもこの日だけだったのである。

「津高校ロマン・ロラン友の会」は、一九五二年一月、折からの朝鮮戦争のもと、窒息しそうな反動の嵐の中で苦しんでいた教師と生徒たちが、生涯自由と平和のためにたたかっていたロランの魂に触れようと結成された、県立高校間ではおそらく全国にも例を見ないサークルであった。高校二年生にして「ジャン・クリストフ」に心酔し、

ロランを人生の師と仰いでいた私は、このサークルで中心的な役割をはたしていた。

宮本正清先生のお名前は、「魅せられたる魂」(これはクリストフとちがって、高校生の悪童には、少々手に余った)や「ピエールとリュース」の名訳者として熟知していたが、もちろん当時は知己を得ていない。

その後、京都大学の文学部にすすんでからも、私のロラン熱はいっこうに醒めず、卒業論文のテーマにも、ロランの作品を選ぶことになったが、この大学は人的にも資料面でもロランとは縁がうすく、思いあまつた私が、恐る恐る宮本先生に手紙をさし上げて助言を仰ぐと、先生は早速返事を下さり、適切な示唆を与えて下さった。

こんな時、高校卒業後も接触を保っていた母校の「友の会」が、講演会の講師を求めていることを聞き、宮本先生にお願いして津での講演を快諾していただいたのである。

なにしろ二十五年前のこととて、ご講演の内容はすっかり忘れてしまったが、殺風景な階段教室で、寒さにふるえながら、教師も生徒も感動して聞き入っていた光景ははっきり思い出される。講演のあと、ストーブの燃え

る校長室にうつり、先生を囲んで記念撮影をした。その写真は今も私のアルバムにある。

感動の余韻に立ち去りかねている高校生たちに先生は、「今日は津に泊りますので夜はあいています。みんな夕食に行きましょう」といわれ、宿舎の近くにあるカフェ兼レストランに、最後まで残っていた六、七人を誘って下さった。その中には「友の会」顧問の小出幸三先生、大学四年の私、そして高校三年だった将来の私の妻もいたのである。

先生は「講演の謝礼をいただいたから、私がお返ししましょう。気にしないで！みんな同じものでいいですね、ビーフカツレツにしましょう」と、有無を言わず注文される。

高校の貧乏サークルのこととて、満足な謝礼もお渡しできなかったことは明らかだから、きっとあれは足が出たにちがいないと、今でも申しわけなく思っている。

めったに口にしたことのないような料理と、よく効いた暖房に、みんな顔を紅潮させながら、先生を囲んで静かに話合ったあの夜の数時間は、われわれの生涯の中でも最も印象深い時間のひとつであった。アンネットやマルヴィーダについて語られたであろう先生の言葉の一

つひとつには、特に記憶がなくても、あそこに座っておられた先生のお人柄というか、きわめて暖かいものが、その日の戸外のきびしい寒さと対照的に、私の心の中によみがえって来るのである。

まもなく私は民間放送の企業に就職、仕事と労働組合の活動などに追われて、ロマン・ロランの世界とは（表面的には）疎遠となり、宮本先生とも、年賀状をさし上げるのがせいっぱいという状態が続く。

だが一九七六年、思わぬチャンスが訪れた。パリの血液研究所に遊学していた医学徒の兄をたよって、ほんの一週間あまりだが、フランスを訪問することになったのである。

はじめは、お定まりのバリ名所めぐり程度のもりだったのだが、せっかくフランスまで行くなら、何とかロランの墓参りだけでもできないものかと思いなおし、久しぶりに宮本先生に手紙をさし上げて、またしても助言を請うた。ご無沙汰ばかりしていて、ご返事などももらえなくて当然と覚悟していたのに、先生は折り返し二回もお手紙を下された。そのうち一回はフランス語で書かれてあり、二通の紹介状がそえられている。ひとつはロラン夫人あて、もうひとつはクラムシー市の助役・ギボン

氏あてであつた。フランス語のお手紙は簡にして要を得ていた。とにかくパリに着いたら直ちにロラン夫人に電話して面会の予約をとりつけること、その上でクラムシール行きの手定をたてギボン氏に知らせること、パリでは日本とちがつて、すべてせわしいから、もたもたしているとも何もできずに帰って来なければなりませんよ……といった文面、そして最後にパリのサント・シャベルのステンドグラスだけは、必ず親で来るようにとのアドバイスが書きくわえられていた。

仏文科の学生時代でも、ろくにフランス語がしゃべれず、さらに二十年も遠ざかっていた私に、宮本先生が命じられたような芸当ができるわけがないのだが、とにかくお手紙と紹介状をポケットにフランスへ飛んだ。そしてことばの方はすべて在仏の兄に面倒を見てもらって、ロラン夫人に二度までもお会いし、またクラムシールのロランの生家と、近郊ブレーブのロランの墓に詣でるといふ千載一遇の感動的な経験をすることができたのであった。この時、クラムシールの助役、ギボンさんは、酷暑の中、特に私と兄のために半日を割いて案内して下さり、昼食にはブルゴーニュ特産の白牛のステーキなどをごちそうして下さいました。まさに宮本先生の紹介状の威力は絶

大だったのだ。

これが縁で、兄はその後モロラン夫人にたびたびお目にかかり、ロラン記念館の落成式にも出席する機会を得た。

一九八一年、再び訪仏した兄が、ロラン夫人と会い、話題が宮本先生のご病気に及ぶと、ロラン夫人は、*va mourir*（直訳すれば「彼は死ぬだろう」と悲しげにつぶやかれたという。日本語にはないニュアンスのことばだが、夫人のあの率直な人柄と、日本の古い友への心情がうかがえる。

宮本先生のご葬儀にはつらい気持ちで参列した。生前のご経歴を紹介するスピーカーの声を道路に立って聞く中で、私は恥ずかしいことに初めて、先生が戦時官憲の弾圧を受け、獄につながれたことを知った。お話でも、文章でも、あまりご自分のことを語られない方だったよ。うな気がする。

それにしても、何かという厚かましく先生のご好意に甘えるばかりで、それこそ何のお役にも立てなかった自分が情ない。せめてもう一度お会いして、お礼が言いたかった。

この拙文をつづるに及んで、なおその思いを深くしている。



1959・1・17 津高校 R.R. 友の会講演会

### 宮本先生と津高ロマン・ロラン友の会

小 出 幸 三

(元高校教諭)

宮本先生に私がお会いしたのは一度だけである。しかし、その日の宮本先生の温容は私の眼に焼きついていて、いまも昨日のように鮮やかに思い出すことができる。

私の手もとに一枚の白黒写真がある。裏面に一九五九年一月と記されている。写真にはストープを前にした宮本先生を囲んで、津高ロマン・ロラン友の会の生徒が三列に重なりあうようにして写っている。宮本先生を中にして右に当時の三輪校長、左には若い私の姿がある。私の右に友の会の初代部長であった大学生の井土真杉さんがいる。あとは三十四名の高校生。井土さんはロマン・ロランを勉強したくて京大の仏文科に学び、卒論もロマン・ロランについてであったが、京大在学中に日本ロマン・ロラン友の会の懸賞論文に応募して入選、二席になったというロマン・ロランの心酔者であった。

津高ロマン・ロラン友の会は一九五二年に成立、高校

のクラブとしては珍しい存在であった。友の会成立に關わってきた私は以後十一年間、津高校を去るまで友の会の顧問を勤めてきた。自由・平和・友愛と人間尊重をスローガンにした友の会は、多くの部員を擁して様々な活動をしてきた。講演会もその一つであった。講師には真下信一、桑原武夫、新村猛、伊吹武彦などの諸先生がいた。地方の高校のクラブであるから、予算も乏しく文字通りの薄謝であったが、どの先生も快よく引き受けて下さった。宮本正清先生も、そのなかのお一人であった。

宮本先生の講演は「魅せられたる魂」のアンネットを例にして、女性の生き方を述べられたものであった。講演終了後、聴衆の高校生は帰ったが、友の会の生徒は校長室に集まって記念写真ということになった。撮影が終ってから、先生を近鉄の津新町駅まで送るために生徒の一部が同行した。いまと違って、通学道路の両側には家が少なく、田畑を吹きわたる風は冷たかったが、講演で受けた感動と、先生と共に歩くことのできる興奮とで、生徒たちは寒さを忘れていた。駅に着くと発車まで時間があつた。先生は「暖かいところで休みますか」と言われて、駅前のフォーゲルという喫茶店の方に歩き始めた。私を含めて十四、五名の生徒が店内に入った。会計の女

生徒が困ったような顔をしていたので、私は小声で「心配するな、ぼくが出すから」と言つて安心させた。明るく暖かい店内でくつろぎながら、生徒の質問に答えたりして、先生は楽しそうであつた。時間がくると、ウェイトレスを呼んだ先生は勘定書を受けとられた。そして、ポケットのなかから薄謝の入つた紙袋を出すと、封を切つてウェイトレスに差し出された。私が口をはさむ余裕はなかつた。釣銭の入つた紙袋を受けとつた先生は、そのままポケットにしまわれた。店を出てから、礼を述べる私や生徒たちに、先生は「楽しかったですネ」と言われた。別れの時がきた。「皆さんのなかから、きつと新しいアンネットが出てきますよ」という言葉を私たちに残して、先生は車内の人となられた。

社会人となつた井土真杉さんが一九七六年に渡仏して、ロラン夫人を訪れた時「遠い日本の津という小さな町に数多くのロランの友たちがいます」と述べると、夫人が大そう喜ばれた、ということを彼から聞いた。井土さんの渡仏に當つて、宮本先生はロラン夫人への紹介状を書いて下さつたのである。

先生にお会いすることのできた、あの日の津高ロマン・ロラン友の会の卒業生たち。誠実に悩む自由な魂たち

のなかに、アンネットのように社会に目を向け、ひたぶるに歩きつづける女性が何人も出てきていることを、亡き宮本先生にお知らせしたい、との思いが私の胸のなかに強くこみあげてくる。

## 宮本先生の思い出

杉本千代子

宮本先生に始めてお目にかゝったのは、日仏学館でのロラン友の会の集りでした。

其の日は、倉田百三作「出家とその弟子」に対するロランからの手紙に就いて、N夫人からの発表がありました。補足として先生は、ロランの日本の若者に対する深い友愛に関して、少し籠ったような渋い声で、ゆっくり話されました。

もう三十数年前のことなのに、その時の小さな教室と堅い木の椅子、等の状況をよく覚えています。

友の会は、年齢、学歴等に関係なく、ロランを愛する

人々、私のような主婦も受け入れられ、今のように、カルチャーセンターのない時代に、ロラン文学の訳者として有名な先生の許で勉強出来た事は、本当に幸せで、あったと思います。

先生が大阪市大を停年退職されてから、友の会は、田中大久保町の簡素なお住居の二階で持たれました。

其頃お宅では、下のお嬢様とお二人暮りでした。先生は何時も、無雑作に着てられるのに、よく似合う和服姿なので、会は一層家庭的で、万事手ぬかりなく準備して頂き、終会後は表まで出て、見送って下さると云う風な、温かく謙遜なお人柄で、それによって会は育てられていったと思います。

会は、当番に当たった方の発表のあと、先生はそれを補足され、作品に対する御自身の深い洞察、ロランの真髓を説明して下さいました。

先生の許には当時、波多野先生、南大路先生、池田隆正先生、大橋哲夫氏等の錚々とした研究者をはじめ、京都は勿論、大阪方面からも秀れた愛読者が集られ、内容の深く深いセミナーが行われていました。

友の会では、ジャンクリストフ。魅せられたる魂。などの大河小説はじめ、歴史小説、演劇、人物評伝。日記、

回想録、ペートウベン研究、したいソフィヤ、ローマの存などようにロランの優しさの溢れるような書簡集など、あらゆるジャンルの作品が次々取りあげられ、それ等を通じて、ロランの信仰、思想、人となりに触れ、一人ではとてもこなせない分野に於て、文学のみならず、生きる指針をも学ばせて頂くことが出来ました。

お嬢様が嫁がれて後、或日、お歳暮の御挨拶に伺ったところ、珍らしく、うら若い女の方がお茶を運んで来て下さいました。先生は、

「郷里の親戚の者です。」

とすましておっしゃるので、お言葉通り承知しております。その時の先生の胸中は、溢れる許りの想いに満たされておられたであろうに、うかつな私は、先生は既に枯淡の境に在られる方と勝手に決め込んでいましたので先にお目にかか、った方と結婚なさったと聞いた時は、本当に吃驚してしまいました。

先生は敬愛するロランに倣い、マリー夫人がロランの遺された仕事を守られたように、若いエイ子夫人に後事を託されるお積りだったのでしょうか。新しく移転された、純京風数寄屋造りの優雅なロマンロラン研究所に於て、以前と変わらず友の会の為に尽して下さいました。

研究所の床の間に飾られている先生のお写真は、ありし日そのまゝに、穏やかな程に強い意志を秘め、ほゞえんでおられます。

## 思 い 出

永 田 和 子

(元高校教諭)

宮本正清先生がお逝きになられて満六年、今年は七回忌にあたられる。同郷とはいえ、何と長く、先生のご指導をいただいたことか。

初めてお目にかかったのは昭和二十九年六月、日本フランス文学会が東京で開催されて先生が上京なさった折、東京ロマン・ロラン友の会の集まりが片山敏彦邸で持たれた。先日、逝去された蛸原徳夫先生、片山敏彦先生ご一家、宮本正清先生、そして波多野茂弥、小尾俊人、山口三夫、美田稔、清水茂姉弟、峯村泰光、北沢方邦の諸氏、隅っこに私。夜は村上光彦氏も参加。皆若い若い。「仏文では仕事ないですよ。」これが宮本先生が一番最初

に私に仰っしゃったお言葉。早稲田の大先輩のお言葉だから耳に痛かったことを覚えてる。

次は前夫人のご遺骨を持って帰郷された先生を上田秋夫氏と共に高知駅頭にお出迎えした。第三回目は昭和三十三年一月、高知女子大学集中講義に帰高された片山先生を囲んで高知ロマン・ロラン友の会を私の家で持った当日、偶然、帰高された宮本先生がお立寄りくださって、片山敏彦、宮本正清、上田秋夫の「高知ロマン・ロラン三傑」が奇しくも一堂に会した、まことに記念すべき一日であった。新婚はやほやの夫は、会には出席しない代りにカメラマンの役目を引き受けてくれた。記念写真はもちろん、ロラン演奏のベートーヴェンの「悲愴」、ヘッセの「ガラス玉演戯」の朗読録音のディスクに耳を傾ける片山先生の横顔などをカメラにおさめた。

京都のルーヴル美術展に夫と二人で出かけたなら、たまにたま会場から出てこられた先生にお目にかゝり、長い長い立話を先生とお話したことだった。そして片山先生ご逝去後、高知女子大学の文学論集中講義は宮本先生にバトンタッチされて、先生はご帰高ごとに、我が家にお立寄りくださった。先生のお講義は大抵、高等学校の二期期末考査の時期であったから、平素多忙な私は、お食

事やお茶をゆっくりといただきながら、たっぷり先生からお話を拝聴することが出来た。今にして思うと大学の連続講義を終えてからであるからさぞお疲れであっただろうに、先生は、にこにこしていつもお迎えくださった。大学教授でいられる先生は、若い者に話を合わしてくださって、とてもお話しやすく、それに、かならず合槌を打ってくださるので話題は途切れることがなかった。郷里へ帰られた解放感もあられただろうか、親密にお話をしてくださった。先生は気さくでいられる上に、マナーが素晴らしく、先生の積年の社会生活の豊かさが偲ばれる。私たちが家を建てた時、先生はお泊まり客の第一番目であった。記念に、先年、物故された高知女子大学フランス語教授の正木番先生をお迎えしてロランの会を持つことが出来た。ロラン百年祭でマリー夫人来日の折は、お呼びいただき、上田秋夫氏、そして長女と三人で上阪した。会場ではただ一人の子供であった長女は、ロラン夫人へのブーケ進呈の大役をさせていただき、光栄なこと忘れられない。

東京の友の会の連中は、片山、宮本この両巨頭の相貌が土佐人の海洋型、山岳型の代表などと噂するけれども、片山、宮本、上田と三人三様、非常に異なる性格で、私

にはまことに興味津々たるものがある。片岡美智女史の存在も、大きい。人はその置かれた時代、環境、性格、などによって自己形成をなしてゆくが、ロランにつながるこの四人の先達は、土佐の誇りだと私は思っている。

宮本先生の人なつこい性格は、万人から愛されたのではないかと想像される。私が不在の折も日本近代文学専攻の夫と二人でゆっくり話をなさってお帰りになられる。歩くことが大好きで、歩いて片山敏彦先生の墓参にお伴させていた。ある夏、あまりに暑いので先生と先生の姪御さん、私、私の友人の四人で愛媛県の面河溪谷に避暑の一泊旅行に出かけた。翌朝、私たち女性群は、大寝坊をしたのだが、先生は早朝のロシヤ語講座を聴き、フランス語日記も書きつけ、一仕事を終えておられた。年の暮に来高される時は、カバンの中に上書きだけした年賀状を、たくさん入れて、添書をして片端からポストに投函される。田舎者の私などからみると先生のご精励ぶりは見事であった。ときどき、宮本先生が実業家でありながら想像するのが楽しかった。

エイ子夫人とご結婚になってからは必ずお二人でご帰郷、先生の講義中、夫人と私はおデートの楽しみを味わった。同じ四国の人間であるせいか、気さくなエイ子

夫人のおしゃべりは、また格別に面白い。宮本先生とエイ子夫人のご結婚を私は、ロランとマリー夫人になぞらえてみたりして一人で楽しんでる。ロマン・ロランに賭けておられた宮本正清先生のことを思う時、後に続く私たちは、うかうかしてよいものだろうか。

### 「心のアルバムから」

成田雅美

(公務員)

読書ノートには生まれた一枚の新聞記事。一九七四年、レジョン・ドヌールを受勲なさった宮本先生の快活な笑顔がございます。お礼を拙く述べた殆んど見ず知らずの私の葉書に丁寧な御礼状を下さいました。その四年後、銀閣寺前町の御宅をお訪ねした際、気さくに並んで下さったスナップでは、心なし御病気のお疲れが伺えるようです。そして御逝去後奥様からいただきました和服の御姿は、温かな慈愛に充ちたまなざしでございます。これらは、ロマン・ロラン、いいえ一度しかおめにか

かれませんでした。が、宮本先生に出逢えました私の幸運な人生のひとつです。

中学生時代、「魅せられたる魂」という題名に惹かれ読み始め、それ迄の世界文学と違う何かを感じました。話しあえる仲間や友も身近に居らず、青春の悩みと共に寂しさを抱いていた或る日、研究会の案内記事を見かけました。早速、若さにまかせ感想等を連ねた問い合わせの手紙を出しましたら、数ヶ月、どこかを巡った末、宮本先生の元に届いたそうです。あきらめ、忘れかけていたところへ何と訳者であられる方から御返事が届いたのですから驚きと感激で胸一杯でした。

一九七一年、渡欧なさるとの事で、便せん三枚の会についてご説明の末尾に、「留守中何か聞きたいことありましたら〇〇先生が友人ですから……」とご親切に連絡先まで書き添えて下さいました。

その後、必ずしもロマン・ロランの熱心な読者と言えない時期もありましたが、「生命の歌」を知った頃から、宮本先生ご自身に親しみを覚えさせていただきました。

“風・Moment・秋のころ・牙え・おもひ・微光”等々。感動を筆に致しましたら、ユニテ第一号を送付下さいました。いつか京都へ行けたら、学びの浅い私は隔

で眺めていられるだけでも、と宮本先生の研究所に集う方々の存在は大きな励みにもなりました。ひき続いて、「若い頃の詩集です」と「レ・トロワ」をも送って下さったのです。一九五四年のその詩集は大切な思い出の品になっております。

ご健康がすぐれないらしいと知り、尚更、お逢いしたいと願ひ、とうとう北海道を発ちました。友の会の方がお世話下さったものの、緊張の余りばうっとし、礼儀も行き届かぬ私を御夫妻は暖かく歓待下さいました。

知的で洗練された雰囲気の奥様に見とれ、自分ますます小さく思いました。書庫の中は宮本先生がご案内下さり、中の一冊を手に取りられ、フランス語をつぶやかれました。自分の不勉強を色々心の中で恥じたものですが、宮本先生は終始にこやかに、こちこちの私を解きほぐそうとなさるかのようにお話し下さいました。奥様の御心尽しのお料理やデザートも忘れがたい味わいでした。

今日の想い出に、お土産にと「ロマン・ロラン」母への手紙（みすず書房）をいただくことになり、「何かお言葉を……」と図々しくお願い致しましたら、ちよっと思索なさって別室にいらっしやいました。戻られる間、試験の結果を待つ生徒のような気持でした。その立派な本の

表紙裏にはこう記されています。

「お互いに小さな力を出し合って、

援けあいましょう

ロマン・ロランを愛しうる人々！」

一九七八年 訳者 宮本正清

本当にもう十年が過ぎました。宮本先生のご逝去とい  
う大きな悲しみを経て、なおかつずうっと、私に多くの  
励ましと御教示を下さいます奥様に深く感謝致し、宮本  
先生が結んで下さった御縁かしらとありがたく思ってお  
ります。まだまだ生き方を模索中の私です。宮本先生の  
信念を学び、歩んで行きたいです。



叔父ゆずりの机

## 宮本正清先生の想い出

森 口 康 子

宮本正清先生が昭和五十七年に逝かれてから早や六年、  
私が先生を知ってから四十年という歳月が流れ過ぎよう  
としている。

昭和二十三年秋、日仏会館のフランス語講座の初級に  
入り、そこで初めて先生に出会った。翌春入学した同志  
社女子大学で、偶然フランス語の講師として先生からフ  
ランス語を習った。一年あまりしてフランス政府の招き  
で渡仏されることになり、大きな希望をもって神戸から  
旅立られた。在仏中の先生へフランス語で手紙を出すよ  
うに言われたので、辞書を片手に四苦八苦して書いた文  
にきちんと朱で訂正を入れて送り返して下さった。

帰国されてから再び女子大の教壇に立たれ、新たにロ  
マン・ロランについての講義を始められた。人類のユニ  
テを信じ、自由な精神の為に生きたロランの生涯と数々  
の作品を紹介して下さい、私は次第にロランに傾倒する



1968. ロマン・ロラン夫人来日記念パーティー

ようになった。当時、発足して間もない大阪のロマン・ロラン友の会の例会にも参加して、ロランを敬愛してやまぬ多くの人達を知ることが出来た。

大阪市立大学の教授をされていた先生のおすゝめもあって、その後市大に学士入学をして、宮本・蛭原両先生から暖かいご指導を受け、卒論に「魅せられたる魂」を選んだ。

それから三十年あまり、数々の遠い想い出の中で、特に昭和四十三年九月、先生のご尽力で実現した「愛と平和に生きたロマン・ロラン展」の感動と、その時来日されたロマン・ロラン夫人を迎えて催された歓迎晩餐会で先生の喜びに満ちたお姿が今でも鮮かに蘇ってくる。

現実の生活の中で、いつとはなく疎遠になっていたロマン・ロランの作品の幾冊かをこの機会に読みかえして、若き日にロランへと導いて下さった亡き宮本正清先生を偲び、心から感謝の気持を捧げたいと思う。

尚この八月に他界された蛭原徳夫先生のご冥福を合せ  
てお祈りしたい。

昭和六十三年八月末記す

## 素顔の追想

宮本 エイ子

宮本正清を送って、はやくも六年が経過しようとしております。彼が晩年ポツリといった一句が、今もわたしを捉えています。もう十年も前のことになりましたが、闘病生活を送っていたある日のことです。突然「ラ・ヴィ・エ・クウルト（人生は短い）」とつぶやきました。溢れ出るものを鎮めた八十歳の心の叫びは、重くわたしに響いてきました。年を重ねると、昨日も今日もなく、彼にはもう明日がないことまで、予知していたのかもしれない。はかない生命にたいする哀しさを、悔しさが漂うていました。遠くを想い、時の流れの興を手にするようなこの素顔の回想に、わたしは「ノン」ということも、頷くこともできず、ただ秋の昼下がりの障子に移ろう陽炎を覗いていたのです。

この度、財団法人ロマン・ロラン研究所は、尾壁善司先生をはじめとするそれぞれの分野でご活躍の方々のご協力を得、再出発いたしました。復活「ユニテ」は、宮本正清追悼集を編むことで再スタート。故人は、はにかみ恐縮しながらも、どんなにか喜んでおりますことか。さまざまな屈折のなかで、友人、知人の方々のご好意と友情に、そして今回玉稿をお寄せ下さいました皆様方に、故人に代わりまして心から御礼申し上げます。思えば、わたしは故人の晩年十数年間の道づれと申します。うか、相伴いながら、共通の経験を持った者でございます。彼が若かったのか、わたしが老いていたのか、なんとも他人には不思議に映ったことございません。五年間、老いと病をともに闘って、最期を看とったとはいえ、それを埋めてなお余

りあるものが、わたしに与えられたのです。

一度として、がみがみ小言をいったり、お説教をするというようなこともなく、常に自ら身をもって示したものでした。病床のなかからさえも得がたい教訓を送りつづけたのです。

宮本の許へまいりまして、「さすが京都だ」と驚き、感心していたことがあります。窓を開ければ、雑草が取れるような田畑のまん中で育ったわたしには、家の庭に草が生えていない、生えてこないことが不思議でなりませんでした。ところが彼が寝込んでからは、あつという間にベンペン草がはびこってしまいました。朝食前の一時間程をきまって草取りにあてていた彼の姿が、いまさらながら目に浮かぶのです。

自宅療養が困難となり、余儀なく入院いたしました。いつ死が訪れてもおかしくない状態のなかで、時折口にする病人の言葉はフランス語だったのです。すでに正常な意識は失われ、判断能力は欠け、自分のことも自分でできない、見たところ、もう昔の宮本先生はどこにもありませんでしたが……。絶えゆきながらも、全身体細胞のすみずみまでフランス語は浸透していたのでしょうか。わたしは思いました。彼のフランス語、フランス精神こそは本物だったと……。

一九五二年から毎日欠かさずフランス語で、彼は日記をつけていました。その日記は一九七七年十二月三十日でアツリと切れております。発病の前日です。それから五年近く、再び元にかえれないとは誰が思ったのでしょうか。その日記について、元氣な時わたしにこういいました。「僕の専門はフランス語、フランス文学だ。これで生活しているんだからなあ。大工さんがノミとカンナを毎日研ぐのを忘れたら駄目だろう。僕のフランス語だってそれと同じだよ。毎日使わなかったら錆びついてしまうさ。いうなれば僕はフランス屋の職人だよ」

ロマン・ロランについても同様です。ほとんど毎日、彼の作品を読んでいた。そしてそれを日本語に置きかえるのです。たとえ五分、十分であろうとも。翻訳は目立たない仕事です。しかし宮本は「僕が自分のものを書くより、ロランを日本へ紹介することの方が、はるかに意味があるんだよ」と。これが彼の口ぐせでした。決して謙遜や卑下ではなく、世界へ目と心を向けた正直な人間だったと思います。最後の作品となったのは『Un beau visage à l'ouï sens』(ここから見ても美しい顔)というタイトルの、ロランが若い時から死の直前まで、世界各国の人々にあてた書簡集でした。この奇妙な題名は、モンテニユの『エセー』のなかに由来し、美しい顔とは精神的なものを示すようです。

しばしば、「目が疲れ頭がくしゃくしゃになる」と嘆きながら、老眼鏡をかけ、さらに大きな虫メガネをあてて辞書を見ていた姿をご想像下さい。「ロランは老いをどうみてたんだらうね？」自らに問いかけるように、同時にわたしに話しかけるようにつぶやいていました。運命ともいえる老化さえも、否それだからこそ、師と仰ぎ敬愛してやまなかったロランに、晩年一層病身だったロランに、最後にこの問いを投げかけたのです。彼のこの問いかけは、ごく自然に口に出されました。故人はロランの著作を何度となく読み、項目別にカードを作成しておりました。愛、男と女、友情、幸福等々、何万枚にも及ぶそのカードのなかに老いというのをわたしはまだみつけておりません。彼はこれまでわたし以上に、魂は瑞々しかったのです。そのカードは未完のまま、書庫のなかに眠っております。

老いは自覚したその時から始まり、誰でもそこへいくもの。心の泉は枯れずとも、身体の老化は防げません。がやがて心身ともに衰えていきます。わたしたちは年齢差では親子関係

でしたが、その過程を夫婦という共通、同一線で見つめあわねばならない悲哀がありました。故人の場合、若い時の結核菌が弱った体のすきに乗じて食い込み、最期まで放きなかったのです。繊細で内向型の彼は、運命的なその病根が内在しつつあることを自覚しながら、誰にも告白できなかったのです。それ程重大だったのです。ただならぬ気配をわたくしは感じ、「仕事はそのくらいにし、休まして、一度人間ドックにでも入ったら」と促しますと、とたん不機嫌になり「余計イライラする」といいながら一日が終わり、また翌日も同じといった状況が続きました。そんな繰り返しの末、とうとう病の人となったのです。

老いへの不安、病氣への恐怖を、孤独にひとり耐え、闘おうとさえした老学者。が、ついに極限に達し、意識の糸が切れてしまいました。その時、それが神さまの最上の贈りものだと思いがつくでしょうか。自然をこよなく愛し、わが家の、わが研究所の春の芽ぶきの庭を見ながら、「こんなに愛しい自然とどうして別れられようか」と独白した人が……

宮本は自分の仕事—フランス語、ロマン・ロラン—を自己と一体化し、日常生活にまで同化していったのです。現代は多才な人達が多彩に活躍する時代です。格好よくスマートにファッションブルに……。その道ひとすじなどというのは野暮の骨頂かもしれません。彼の生き方は、ひと昔前の徹底的にダサイそれといえるかもしれません。時代の流行や、外からの影響によって反射するのではなく、常に自らの内なる声に忠実であろうとしました。高知の山深い寒村の土から生まれ、フランス文学に憧れ、一生それにとりつかれた、「死のなかにおいてすら前進する」ことを願った une vie だったといえないでしょうか。

財団法人ロマン・ロラン研究所だより

このたび財団法人ロマン・ロラン研究所の役員が一新されて、次のように決まりました。

理事長 尾埜善司

理事 池田隆正、今江祥智、大谷暢順、大橋哲夫、小尾俊人、佐々木昌義

野村庄吾、宮本エイ子、森本達雄

監事 稲畑勝雄、西村 明

評議員 石田和男、杉本千代子、多田淳子

鳥井素三、永田和子、安田俱子



ロマン・ロラン セミナーだより

□昭和六十三年五月二十八日(第118回例会)

於 ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』への序について

発表者 大橋哲夫

□昭和六十三年六月二十五日(第119回例会)

於 ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』第一巻曙Ⅰ

発表者 多田淳子

□昭和六十三年七月二十三日(第120回例会)

於 ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』第一巻曙Ⅱ

発表者 杉本千代子

□昭和六十三年九月二十四日(第121回例会)

於 ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』第一巻曙Ⅲ

発表者 大橋哲夫

□昭和六十三年十月二十二日(第122回例会)

於 ロマン・ロラン研究所

『ジャン・クリストフ』第二巻朝Ⅰ

発表者 宮本エイ子

編集後記

宮本正清先生がなくなられてから、すでに六年になるうとしています。おくればせながら「ユニテ」で追悼号を出すこととなりました。一九八三年三月に「みすず」で追悼号が編さんされましたが、今回はなるべく「みすず」追悼号執筆者以外の人たちに書いていただきたく、ご依頼しましたところ、ごらんのようにたくさんの方から玉稿を寄せられました。今さらになき宮本正清先生のご人徳をしますのであります。執筆者の中で、谷口知平氏、山口善造氏、井土真杉氏の三氏の原稿は、五年前にお預りしていたものでもあります。もっとはやく「ユニテ」の追悼号を出すつもりが、このようにおそくなったことを申しわけなく思います。

(大橋哲夫)

編集委員

大橋哲夫

鳥井素三

西村 明

野村庄吾

宮本エイ子

ユニテ 第一六号

発行日 一九八八年一月一六日

発行者 (財)ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話(〇七五) 七七一―三三二八―

郵便番号 六〇六

印刷所 恒 星 社